●暹羅文部次官と幼稚園　先頃我邦の教育事業を視察したる、暹羅文部次官には、我國の教育が進歩し居るに驚嘆せし由なるが、就中幼稚園教育の整備したるに感じ、是非自國にても、此の如き制度を實行するの必要ありとて、既に保姆の雇聘方を文部省に依頼したりと。

●江原素六氏の食事の修身談　氏曰く歐米の信教者も教祖の行狀に倣ひ食事ごとに必らず神に感謝の祈禱を捧げざるはなし其旨趣孔子祈る所と全く相異る所なし。北米合衆國の大統領「ワシントン」も亦食事に對して自ら定めたる行規あり、即ち其言語作法百十則のうちに曰く、食物を道樂とするの風ある勿れ、貪るが如くして食する勿れ、食卓の上にて脊をかゞむる勿れ、己の食物に向つて不滿を洩す勿れ、如何なる事ありとも食卓の上にて怒を發すること勿れ、若し來客あらは汝の容貌を温雅にせよ、温言は一皿の肉をも大饗應となすべしと。

それ食事は一日三回づゝ來るものなり、其都度怒を忘れ滿足を感じ、愛情を崇め、親睦を增し、和樂以て糧食するあらば、不知不識の間に吾人の品性を修養するに盡す所少なからざるべし、箴言に

睦ふして乾ける一撮のパンあるは爭ありて肥えたる肉の豐かなるに優れり

又其禮式としては、孔子は食するに語らず、寢るに言はずと、而して近世歐米謳歌者流はいたくこの教規を誹謗せり、曰く食事は貴重なる生命を繫ぎ吾人人たる義務を遂行する健康に關するものなり、故に大に喜び且つ樂んで食ふべきなり、故に犬馬の如くたゞ食するばかりにあるべからず、宜

しく互に潔く且樂しき欵話をなしつゝ頗る興味あるべしと。

吾人は敢て此の如き主旨を排斥するものにあらず然れども孔子の語らずとは終食の間一言の應答を全く爲すべからずといふにあらず、たゞ食事は談論の時にあらざるを示したるものなり。

殊に今日の如く衛生の問題囂しき時に於て食卓に向ひ、一點憚る所なく口角泡を飛ばし放談をなすが如きは、寧ろ愼しむべきを宜しとす。

歐米の人食卓に向ひ談話をなすといへども、甚だ小音にして僅かに隣席のものに對し、必用だけの聲を發するに過ぎざるなり。食事の作法につきては往々にして人の品性を上下するをあり、平將軍將門の如き、北條氏政の如き例甚だ少なからず。平將門曾て藤原秀郷と共に食するや、甚だ粗野にして飯粒前に墮ちければ、遽しく拾ふて之を喰へり、秀郷其輕率にして共に爲すあるに足らざるを知るや、乃ち去つて貞盛に從ふと。

又北條氏康は其子氏政の食事を爲すを見て歎息落涙して曰く、北條家の基業氏政の代にして斷滅に歸すべしと、侍者驚て其故を問ふ、氏康曰く今氏政が食するを見るに一飯に汁を兩度かけて食せり凡そ人は貴も賤も一日に三度づゝは必らず食するものなれば鍛錬せずといふことなし、一飯に汁を掛くるに其加減を覺へすして足らざるとて又掛くるとは愚かなることなり、朝夕すべき小事すら此の如し、況んや大事の湧出せし時に於てをや。

今日の青年自から盛りし汁、自から汲みし茶を殘し、其他卓上を汚すなど不行跡甚だしきものなさにあらず、殊に遊戯に浮かれ食事の時を忘れ、

り屢々後れて食事をなし下婢を煩はし臺所の整理を妨ぐるもの甚だ少なからず、大に省る所なかるべからず

食事に對し守るべき教規儒教之を論ずること甚だ深切なり、然りと雖ども具さに之を陳ぶること能はず之を要するに徒らに消極的粗食糲飯をこれ是とするに非ずして、衛生の理に適ひ滋養に注意して健全の體力を得んとするに在り。

自己の食事に對して注意を要すると同じく、他人の食事に對しても亦大に考慮する所なかるべからずたとへば人を訪問する如き務めて食事時間を避け他人の食事を妨げざる等其他條項甚だ少なからず。

●肺病の傳染につきての所說に曰く

柴山傳染病研究所技師

肺病の傳染には二種あり、一は乾燥したる喀痰中に包蔵せるバチルスが大氣中に飛散し、呼吸に依て吸入すること、一は肺病者が強咳したる際細唾に混入し大氣に散するを吸入する之れなり、第一の傳染は大に恐るべきものにて十中八九は之に起因す、第二は尤も重病なるもの、又は三尺以内の距離に對顏したる場合にあらざれば容易に傳染せず、旅館の寢具口洗コップ食器等は大に第二の傳染を助長する機會となることあり

バチルスは乾燥したる空氣中にあるときは幾年經過するも死亡することなし、濕潤は攝氏八十度に至れば死亡す、又寒に耐えるの特性あり、人工を以て與ふる冷寒にては決して死することなし、肺病は療治に易き病症なるは現今獨逸醫學界の均しく唱道する處なるか實際然るが如し、獨逸政府が六年前に各病院に命じて肺病以外にて死亡したる者の解剖統計を徵したる百人中六十人は皆肺病に罹り全治したる痕跡を肺に殘しありたり、更に病人に向て一々肺に罹りしことの有無を糺し、其無しと答ふるもの〻死體を解剖するも同一の結果を得たり、故に人は知らざる間に肺に罹り只軟弱性のもの〻み不治の症となるものにして、他の强壯なるものは其治すこと容易なり、一旦肺病に罹りたる者は當人の知ると否とに關せず全治したる者は肺に斑痕を存する故、解剖するときは直ちに種別し得るなり、之等は實例に依る時は尤も恐るべき病氣にして、人間の多數は知らざる間に常に罹り居る病氣なり、如此ならば畢竟各自の身躰の營養如何により强者には治し易く、弱者には不治の症となる結果となるなり云々（大日本婦人衛生新誌）